

朱雀大路・二条大路の調査(平城第576・578次)

2016年度の秋から冬にかけて、都城発掘調査部(平城地区)では、昨年度から引き続き国土交通省が進めている史跡朱雀大路等の整備にともなう発掘調査をおこないました。

今回の調査区は、左京一坊域の二条大路(平城第576次)、および右京一坊域の二条大路と朱雀大路との交差点(平城第578次)の2ヵ所です。

第576次の調査目的は、平城第566次西区(右京一坊域)で検出された二条大路を横断する南北溝が、対称地である左京一坊域にあるかを確認することでした。本調査の成果としては、二条大路を横断する南北溝はみつからず、第566次西区で検出された南北溝は左京と右京とで左右対称に配置されていないことがわかりました。また、本調査区のすぐ西側では、宮内の基幹排水路(SD1175)が南面大垣を貫いており、二条大路北側溝に流れ込んでいたと考えられています。そのため、今回の調査で検出した二条大路北側溝の溝幅は西側で7.5mと通常の側溝幅に比べて広く、合流部付近はその水量によって大きくえぐられていたと推定できます。

第578次の調査目的は、朱雀大路と二条大路とい

う主要道路の交差点をあきらかにすることでした。これまでの調査(平城第143次・566次等)で、朱雀大路の両側溝は二条大路を横断すると推定されていましたが、今回の調査で、朱雀大路西側溝が二条大路を横断することが確認できました。朱雀大路西側溝の幅は2.8~3.6mと、場所により差がありますが、深さはおよそ0.5~0.7mほどです。大路の交差点にこれだけの大規模な溝が通っていて、当時の人々は困らなかったのでしょうか。

そこで、朱雀大路西側溝に橋が架けられていたかどうか調査の焦点となりました。結果として、橋脚とみられる遺構や橋の木材などは今回の調査ではみつかりませんでした。しかし、朱雀大路西側溝の東岸で興味深い発見がありました。それは、東岸は直線ではなく凹凸がある、ということです。溝の中にはほぼ等間隔に3ヵ所張り出している部分があります。これらの張出は、二条大路の中軸上とその両側に約9m(25大尺)の間隔でみつかっています。また、東岸には杭を0.4~0.6m間隔に打ち込み、その間に細い枝を沿わせたしがらみ護岸がみつかっていますが、これらは突出部分を避けて施されています。さらに、中央張出と北張出の間には、しがらみ護岸の裏側に長い木材が埋め込まれており、これらの木材も突出部分を避けて設置されています。以上のことから、これらの張出は溝が掘削された当初に意図的に掘り残された部分であると考えられます。

この張出部分については、他の大路の側溝での類例がなく、どのような機能を持っていたのかはわかりません。しかし、想像をたくましくすると橋と何らかの関係がある構造物なのかもしれません。これらの張出部分の解明に向けて、今後の周辺調査の進展や類例の発見等が期待されます。

(都城発掘調査部 浦 蓉子)



二条大路北側溝(東から)



朱雀大路西側溝(南から)